

平成26年7月3日

各 位

公益財団法人 大同生命国際文化基金

2014年度（第29回）大同生命地域研究賞
受賞者の決定および贈呈式の開催

公益財団法人 大同生命国際文化基金（大阪市西区江戸堀1-2-1 理事長：喜田哲弘）では、標題の研究賞について、本年度の受賞者を下記のとおり決定いたしました。

つきましては、贈呈式を開催いたしますのでお知らせいたします。なお、受賞者ならびにこの賞に関する資料を添付いたしますのでご覧ください。

記

1. 贈呈式

日時：平成26年7月11日（金）午後2時～

場所：一般社団法人 クラブ関西

大阪市北区堂島浜1-3-11 電話：06（6341）5031

2. 受賞者

1) 大同生命地域研究賞（副賞300万円ならびに記念品）

上智大学 教授（特別招聘教授）

上智大学アジア人材養成研究センター 所長 石澤 良昭 氏

2) 大同生命地域研究奨励賞（副賞100万円ならびに記念品）

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 准教授

大山 修一 氏

滋賀県立大学 人間文化学部 国際コミュニケーション学科 准教授

島村 一平 氏

3) 大同生命地域研究特別賞（副賞100万円ならびに記念品）

写真家

板垣 真理子 氏

以上

照会先：公益財団法人大同生命国際文化基金 事務局（北迫）

電話 06（6447）6357 / Fax 06（6447）6384

2014年7月

大同生命地域研究賞について

1. この賞を設けた趣旨

大同生命国際文化基金は、大同生命保険相互会社(当時)の創業80周年記念事業として、外務大臣の認可により1985年3月に設立された財団法人であります。その目的は「国際的相互理解の促進に寄与する」こととし、そのためいくつかの事業を行ってきました。

この賞は、「地球的規模における地域研究」に貢献した研究者を顕彰するもので、様々な地域の人と文化に対する理解を究極の目的としている点で、本財団の設立目的と一致します。それはいわば国際的相互理解を考える上で最も基礎的な部分を担うもので、医学に例えれば臨床医学に対する基礎医学のような関係にあたります。こうした理解に立ち、関係学界の協力を得て、この賞を創設しました。

2. 賞の内容

この賞は、次の3部門で構成されています。

(1) 大同生命地域研究賞

多年にわたって地域研究の発展に著しく貢献した研究者1名に対して、賞状、副賞300万円ならびに記念品を贈呈するものです。

(2) 大同生命地域研究奨励賞

地域研究の分野において新しい展開を試みた研究者2名(地域研究賞の該当者がいない場合、3名とすることも可)に対して、賞状、副賞100万円ならびに記念品を贈呈するものです。

(3) 大同生命地域研究特別賞

対象地域を通じて、国際親善、国際貢献を深める上で功労のあった者1名に対して、賞状、副賞100万円ならびに記念品を贈呈するものです。

3. 選考

- (1) 選考については、本財団が委嘱する選考委員で構成する会議により決定されます。
2014年度の選考委員は次の5名です。

(五十音順)

総合地球環境学研究所名誉教授	秋道 智彌 氏
日本女子大学文学部教授	臼杵 陽 氏
一般財団法人自然環境研究センター理事長	大塚 柳太郎 氏
大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 理事	小長谷 有紀 氏
東京外国語大学大学院総合国際学研究院 特任教授	島田 周平 氏

- (2) 候補者の推薦については、全国の大学、研究機関等の研究者に推薦委員を委嘱し、推薦委員より書面による推薦を受けることを原則としています。

以上

2014年度

大同生命地域研究賞受賞者一覧

◆大同生命地域研究賞 (副賞300万円ならびに記念品)

「カンボジアのアンコール王朝を中心とする東南アジアの
歴史研究と遺産修復・保存に関する地域研究」に対して

上智大学 教授 (特別招聘教授)

上智大学アジア人材養成研究センター 所長 いしざわ よしあき
石澤 良昭 氏

◆大同生命地域研究奨励賞 (副賞100万円ならびに記念品)

「アフリカ地域における環境と生業に関わる学際的、実践的研究」
に対して

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 准教授

おおやま しゅういち
大山 修一 氏

◆大同生命地域研究奨励賞 (副賞100万円ならびに記念品)

「モンゴルにおけるナショナリズムならびにエスニシティに関する研究」
に対して

滋賀県立大学 人間文化学部 国際コミュニケーション学科 准教授

しまむら いっぺい
島村 一平 氏

◆大同生命地域研究特別賞 (副賞100万円ならびに記念品)

「熱帯地域における音楽文化の記録と紹介に関する啓発活動」に対して

写真家

いたがき まりこ
板垣 真理子 氏

2014年度
大同生命地域研究賞

石澤 良昭 氏

(上智大学 教授 (特別招聘教授)、
上智大学アジア人材養成研究センター 所長)

略 歴

石澤 良昭(いしざわ よしあき)

1. 現 職 : 上智大学教授 (特別招聘教授)
上智大学アジア人材養成研究センター 所長
〔勤務先電話番号 03 (3238) 4136〕
2. 最終学歴 : 中央大学 文学博士学位取得 (1977 年)
3. 主要職歴 : 1971 年 聖マリアンナ医科大学医学進学課程専任講師
1977 年 鹿児島大学教養学部助教授
1982 年 上智大学外国語学部教授
1984 年 上智大学アジア文化研究所所長及びアジア文化研究室長 (～93)
1995 年 上智大学外国語学部長 (～98)
2002 年 上智大学アジア人材養成研究センター所長 (～現在に至る)
2005 年 上智大学学長および上智学院学務担当理事 (～11)
2006 年 文部科学省文化審議会文化財分科会長 (～09)
高松塚古墳損傷問題調査委員会委員長
2007 年 文部科学省文化審議会会長 (～09)
2010 年 外務省・文部科学省共管「文化遺産国際協力コンソーシアム」
会長 (～現在に至る)
2011 年 上智大学教授 (特別招聘教授) 及び上智学院学術顧問
現在に至る
4. 主な著書・論文 :
 - ① 『〈新〉古代カンボジア史研究』〔風響社, 2013〕
 - ② *Challenging the Mystery of the Angkor Empire*, SUP Tokyo 2012
 - ③ 『東南アジア多文明世界の発見』〔講談社, 2009〕
 - ④ *Mannuel d'Epigraphie du Cambodge*, EFEO Paris 2007
 - ⑤ 『アンコール・王たちの物語』〔NHK 出版, 2005〕
 - ⑥ 『東南アジア古代国家の成立と展開』〔岩波書店, 2001〕

以上のほか、現在に至るまで論文著書多数

業績紹介

「カンボジアのアンコール王朝を中心とする東南アジアの歴史研究と
遺産修復・保存に関する地域研究」に対して

紹介者： 秋道 智彌

(総合地球環境学研究所 名誉教授)

東南アジア諸王朝の興亡史に関する研究では、1992年に世界遺産として登録されたカンボジアのアンコール・ワット及び周辺遺跡が世界的に注目されてきた。石澤良昭氏はアンコール・ワット遺跡に魅せられた数少ない日本人研究者であり、氏が20代前半であった1960年代より現地で遺跡保存にかかわる研究に着手した。とりわけ9～14世紀におけるアンコール王朝(802年頃～1431年頃)の王都であるアンコール・ワットの寺院建築に関する碑刻文、建築物、美術様式などについての独創的な研究を手がけてこられた^{*1}。長年にわたるアンコール・ワット遺跡を中核とする石澤氏の東南アジア史研究の業績は以下に示す通り四つの特質と達成点にまとめることができる。

第一に、アンコール・ワット遺跡における宗教的な大伽藍の建築をささえたアンコール王朝の経済・政治基盤とその歴史の変遷を解明する研究が達成されたことである。とりわけ、遺跡に残された碑刻文の詳細な分析から、高度な自給自足の農業国家でありながら、物流と交易のネットワークを通じてインドから南中国にいたる周辺地域との東西交易を実現していたこと、王位継承は世襲制ではなく、継承戦争があったこと、王朝の高位実務者集団が行政・税務・軍隊・総務的業務、法秩序の諸職を執り行い、国内の平和と安全の確保に尽力したこと、当時の村人の日常生活や副業的活動の実態、祭祀のあり方など、社会と文化に関する詳細があきらかにされた。近著の『〈新〉古代カンボジア史研究』がその到達点となっている^{*2}。

第二にアンコール・ワット建立と関連する膨大な水利工事と貯水池建造などに不可欠であった労働力は人びとの執拗なまでの、寺院(Āśrama)への寄進行為とそれを功德とする信仰心のあったことがあきらかにされた。寺院で行われた祭儀は、村人に来世を考えさせ、さらに功德(punya)を深化させる意味をもっていた。石澤氏は、王や地方の有力者自らの功德は碑文として刻印せざるをえなかった必然的な行為であったこと、社会的な名声に敏感な人びとが競って寄進したと結論付けた。この問題提起は、人間にとっての功德の本源的な意味を現代世界にも問いかけるものであり、世界の人びとに感銘をあたえるものとなった^{*3}。

第三に東南アジア史を塗りかえる発見が、遺跡発掘情報と歴史史料を総合的に検証する方法論により達成された点を挙げることができる。13世紀後半に「盛土土手道の歴史

街道（王道=thnal）」を通じて、ベンガル湾方面から来訪したインド人王師が廢仏毀釈事件を誘導した。石澤氏はこの歴史事実を 2001 年のアンコール調査団第 32 次調査のなかで、274 体もの廢仏と千体仏石柱を発見したことで史実をあきらかにし、それまでのフランス人研究者の建寺疲労説を覆した^{*4}。この発見はカンボジア史研究上、たいへん大きなインパクトのある成果となった。これらの発掘物は石澤氏門下のカンボジア人研究者が館長をつとめるシハヌーク・イオン博物館に収蔵されている。また 1296 年に元から来訪した周達觀がのこした『真臘風土記』の記録から、ジャヤヴァルマン八世がアンコール都城を改修増築した史実を指摘している。さらに、中国史料を駆使して扶南（ベトナム南部の王国）と真臘（カンボジア）の攻防を精査し、中国史料の誤記や年代などの不整合をいくつも指摘した^{*5}。

第四に、石澤氏のカンボジア研究は東南アジアの歴史研究であるという以上に、カンボジア国に根をおろした着実かつ現場主義に徹した研究活動が特質であることを指摘できる^{*6}。石澤氏は 1980 年以降、氏を中心としてメンバーがカンボジア王国政府と協力し、「カンボジア人による、カンボジア人のための、カンボジアの遺跡保存修復」を哲学とした研究体制を実現した^{*7}。この線上で、アンコール時代の遺跡保存を地域住民自らが主体的に行うべきとの観点から、日本としては唯一の現地型（レジデント）研究拠点となる人材養成研究センターを遺跡現場のシェムリアップ市に建設し、徹底した現場教育を通じた若手研究者の育成に尽力された。石澤氏は、さらに国内外の大学・研究者、博物館人、企業らとの協働による上智大学アンコール遺跡国際調査団を組織し^{*8}、考古・地史・美術・建築・農村調査・保存技術・住民との社会連携など諸分野の研究を統括し、その指導的な役割を果たされてきた。この点は、地域研究として他に類を見ない石澤氏の到達点として後世に継承されるべき遺産となることは疑いえない。

以上のように、アンコール王朝を中核とするカンボジア史の研究とともに、遺跡保存のための社会貢献や若手育成にも幅広く取り組まれてきたことは上述のとおりである。石澤氏の達成した地平は人類の歴史を塗りかえることになった、地域の歴史を詳細に析出したものである。この点で石澤氏の研究は大同生命地域研究賞の目指す精神にもっともよく合致する学術的貢献であると判断し、研究賞の授与を選考委員会において決定した。

*1 『東南アジア古代国家の成立と展開』（岩波講座東南アジア史 第 2 巻）2001 年

*2 『(新) 古代カンボジア史研究』2013 年

*3 『アンコール・ワットの時代—国のかたち、人々の暮らし』2008 年

*4 『アンコール・ワットを読む』2005 年

*5 『アンコール・王たちの物語』（2005 年）

*6 『カンボジアの文化復興』第 1 号～28 号（1984—2014 年）

*7 「上智大学アンコール遺跡国際調査団の活動概要（2001 年～2002 年）」2002 年

*8 「上智大学アンコール遺跡国際調査団」（<http://angkorvat.jp>）（1980 年～）

2014年度
大同生命地域研究奨励賞

大山 修一 氏

(京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 准教授)

略 歴

大山 修一(おおやま しゅういち)

1. 現 職 : 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 准教授
〔勤務先電話番号 075 (753) 7807〕
 2. 最終学歴 : 京都大学大学院 人間・環境学研究科 修了 (1999年)
 3. 主要職歴 : 1999年 東京都立大学 理学研究科 地理学教室 助手
2008年 首都大学東京 都市環境科学研究科 地理学教室 准教授
2010年 京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究研究科 准教授
現在に至る
 4. 主な著書・論文
 - ① 「地球環境問題と生態人類学」『アフリカ学事典』〔昭和堂, 2014〕
 - ② 「西アフリカ・サヘル帯の干ばつと飢饉から生まれた緑化技術：ハウサ社会における資源としてのゴミの有用性」横山智編『資源と生業の地理学』〔海青社, 2013〕
 - ③ Land rehabilitation methods based on the refuse input: local practices of Hausa farmers and application of indigenous knowledge in the Sahelian Niger. *Pedologist* 55(3) 2012
 - ④ 「アフリカの地理学—地理学における新しいパートナーシップの確立にむけて」『地学雑誌』121(5), 2012
 - ⑤ 「西アフリカ・サヘル帯における農村の生業を支える伝統的慣行と食料不足の拡大」松井 健・野林厚志・名和克郎 共編『生業と生産の社会的付置：グローバリゼーションの民族誌のために』〔岩田書院, 2012〕
 - ⑥ 「ザンビアにおける新土地法の制定とベンバ農村の困窮化」掛谷誠・伊谷樹一編『アフリカ地域研究と農村開発』〔京都大学学術出版会, 2011〕
 - ⑦ 「アフリカ農村の自給生活は貧しいのか？」『E-Journal GEO』5 (2), 2011
 - ⑧ Ecological knowledge of Hausa cultivators and in situ experiment of the land rehabilitation in Sahel, West Africa. *Geographical Reports of Tokyo Metropolitan University* 45, 2010
 - ⑨ 「ニジェール南部の乾燥地農耕と砂漠化に対する農耕民の認識」『農耕の技術と文化』27, 2010
 - ⑩ 「ザンビアの農村における土地の共同保有にみる公共圏と土地法の改正」児玉由佳編『現代アフリカ農村と公共圏』〔アジア経済研究所, 2009〕
 - ⑪ 「ジャガイモの栽培化：ラクダ科動物との関係から考える」『国立民族学博物館調査報告』84, 2009
 - ⑫ 「ニジェール共和国における都市の生ゴミを利用した砂漠化防止対策と人間の安全保障：現地調査にもとづく地域貢献への模索」『アフリカ研究』71, 2007
 - ⑬ 「ラクダ科野生動物ビクーニャの生態と保護」山本紀夫編『アンデス高地』〔京都大学学術出版会, 2007〕
 - ⑭ 「糞とジャガイモの不思議な関係」山本紀夫編『アンデス高地』〔京都大学学術出版会, 2007〕
 - ⑮ 「西アフリカ・サヘル地域における農耕民の暮らしと砂漠化問題」池谷和信・佐藤廉也・武内進一編『世界地誌 アフリカ I 総説、イスラムアフリカ、エチオピア』〔朝倉書店, 2007〕
- 以上のほか、現在に至るまで論文著書多数
5. 備 考 : 1999年 人間・環境学 博士 (京都大学)

業績紹介

「アフリカ地域における環境と生業に関わる学際的、実践的研究」に対して

紹介者： 島田 周平 しまだ しゅうへい

(東京外国語大学大学院総合国際学研究院 特任教授)

大山修一氏の地域研究は、住民からの詳細な聴き取り、生態環境の徹底した観察・記録、精力的な計量・計測の実践をもとにした自然・人間関係の総合的把握を特色としている。同氏は、参与観察によって地域の自然と社会の特性を把握し、生業をめぐる在来の知恵から学ぶ一方で、土壌の化学分析、気象観測の実施、リモートセンシングや GIS (地理情報システム) の駆使など、多彩な分析手法を効果的に組み合わせ、真に文理融合、インターディシプリナリーな研究を行ってきた。この点が大山氏の地域研究に対する貢献のひとつである。

さらに、この総合的把握の成果のうえに、圃場^{ほじょう}実験等を取り入れながら環境修復や土地紛争予防に役立つ実践的研究を行っている。これは地域研究における研究と地域開発実践との連携にひとつの新しい方法を示すものであり、同氏のもうひとつの貢献であるといえる。

大山氏のアフリカ研究はザンビア北部に住む焼き畑農耕民ベンバの農業研究から始まった。ミオンボ疎開林に住む農耕民ベンバの農業が、1980年代以降の構造調整計画の中で大きく変化し、それが環境変化にも影響を与えてきたことを明らかにした。市場から遠く離れたベンバの農民たちは、トウモロコシの全国一律買い上げ制度の廃止に直面し、耕作形態のみならず家畜飼養方法も変化させてきた。それがこの地域の環境、とりわけ森林生態に様々な影響を与えてきたことを、リモートセンシングや GIS を用いた土地利用の変化から動的に示したのである。

このような自然・人間関係の総合的理解を追究する同氏の関心は、やがて「新しいアフリカの成長」の中で進行する自然環境の荒廃問題、とりわけサヘル帯における砂漠化(土壌荒廃)問題に向かった。調査の結果、ニジェールのサヘル帯では、市場の自由化や幹線道路の整備が進む中で、都市部での経済活動が活発化し、農村から都市への有機物の流れが急速に増大してきたこと、その結果、農村部で食料不足や土壌荒廃が起き都市部ではゴミ処理と衛生問題が起きるといった同時荒廃を引き起こしていることが明らかになってきた。一方、農耕民ハウサや牧畜民フルベ、トゥアレグの環境利用や社会構造、暮らしに関する詳細な現地調査で、ハウサの人びとが土地荒廃や干ばつに翻弄されるだけでなく、耕作地内の荒廃地にゴミを投入することで自ら環境修復を行ってきたことも明らかとなった。

これらの研究成果を現地における環境修復の方法を探る実践的研究へと発展させようと考えた大山氏は、都市ゴミに含まれる栄養分と重金属の含有量の測定を行い、施肥効果と安全性を検討したうえで圃場実験に踏み切ることにした。圃場実験の成果は、農村と都市両方の環境修復に役立つばかりではなく、家畜による食害が発端となる農耕民と牧畜民の衝突予防にも役立つことが期待され、2006年6月にニジェール政府承認のNGO「砂漠化防止と都市衛生改善プロジェクト」の立ち上げにつながった。社会が直面する問題点を住民の視点にたって析出し、その問題の解決策を地元の技術や思想の文脈で考えると同時に、科学的裏付けをも追求するこのような実践的研究は、地域研究の成果を地域に還元するひとつの具体的事例であり特筆すべき実践的研究であるといえる。

大山氏には、上記に挙げたザンビアと西アフリカのサヘル帯における研究だけではなく、南米・アンデス山脈におけるジャガイモの栽培化とラクダ科動物（リャマ、アルパカ）の家畜化プロセスに関する研究成果などもあり、人間の環境開発の歴史を視野に入れた研究成果も多い。

徹底したフィールドワークによって住民の生活世界の理解に努め、同時に科学的分析手法も駆使して総合的理解に努める大山氏の研究は、マクロとミクロな視点を往還する自由な発想と大きなエネルギーを必要とするもので高く評価できる。また、地域研究の成果を地域開発の実践につなげる同氏の試みは、地域研究に新しい地平を拓くものであり高く評価できる。以上の理由から同氏の研究は研究奨励賞に相応しいものとする。

2014年度
大同生命地域研究奨励賞

島村 一平 氏

(滋賀県立大学人間文化学部
国際コミュニケーション学科 准教授)

略 歴

島村 一平(しまむら いっぺい)

1. 現 職 : 滋賀県立大学 人間文化学部 准教授
〔勤務先電話番号 0749 (28) 8405〕
2. 最終学歴 : 総合研究大学院大学 文化科学研究科
博士後期課程単位取得退学 (2004 年)
3. 主要職歴 : 1993 年 (株)クリエイティブネクサス
2004 年 国立民族学博物館講師 (研究機関研究員)
2005 年 滋賀県立大学人間文化学部専任講師
2011 年 ケンブリッジ大学社会人類学部 客員研究員
2013 年 滋賀県立大学人間文化学部准教授
現在に至る
4. 主な著書・論文 :
 - ① (Forthcoming) Ancestral Sprits Love Mining sites-Shamanic Activities around the coal and gold mining sites in Mongolia. In Uradayn E.Bulag, Ipei Shimamura, and Burensain Borjigin (eds.) *Inner Asia, Special Issue Geopolitics and Geoeconomics of Mongolia's Natural Resource Strategy*, University of Cambridge, 2014
 - ② *The Roots Seekers: Shamanism and Ethnicity among the Mongol-Buryats* [春風社, 2013]
 - ③ *Чингис хаан хэний баатар вэ? : Монгол, Япон, Хятад, Евро-Америк, Оросын харьцуулалтаас* Admon, 2012. 『チンギス・ハーンは誰の英雄なのか：モンゴル、日本、中国、欧米、ロシアの比較を通して』 [アドモン出版, 2012]
 - ④ 『増殖するシャーマン：モンゴル・ブリヤートのシャーマニズムとエスニシティ』 [春風社, 2011]
 - ⑤ 「国境を超えるシャーマニズム」 (滝澤克彦編) 『ノマド化する宗教 浮遊する共同性』 pp.81-126 [東北大学東北アジア研究センター, 2011 年]
 - ⑥ Монголын Буриадын шү тээн онгон “Хойморын Хө гшин” буриад зоны эх гэгддэг болсон учир, *Угсаатан Судлал боть* 20, pp254-260, 2011 「なぜモンゴル・ブリヤートの精霊「ホイモル女房」は、ブリヤート人のグレート・マザーとなったのか」『民族学研究』第 20 卷 [モンゴル科学アカデミー歴史学研究所, 2011]
 - ⑦ 「ハイカルチャー化するサブカルチャー? : ポスト社会主義モンゴルにおけるポピュラー音楽とストリート文化」 関根康正編『国立民族学博物館調査報告 81 号 ストリートの人類学 下巻』 pp.431-461, 2009
 - ⑧ 「文化資源として利用されるチンギス・ハーン：モンゴル、日本、ロシア、中国の比較から」 (滋賀県立大学人間文化学部研究報告) 『人間文化』24 号 pp7-34, 2009
 - ⑨ 島村一平著、包路芳・时春丽訳「阿加·布里亚特人的寻根活动:萨满教新的阐释」『世界民族』2006 No.4, pp.53-59 [中国社会科学院, 2006]
 - ⑩ 「モンゴル・ブリヤート人の悲劇の記憶」松原正毅・小長谷有紀・楊海英 (編) 『ユーラシア草原からのメッセージ』 pp.167-188 [平凡社, 2005]
 - ⑪ 「『患者』が『治療者』になるということ：モンゴル・ブリヤート人のシャーマニズムの事例から」『現代のエスプリ』8月号 pp.52-62 [至文堂, 2005]
 - ⑫ The Movement for Reconstructing Identity through Shamanism : A case study of the Aga-Buryats in Post-socialist Mongolia, *Inner Asia* vol.6(2), Cambridge, pp.197-214, 2004

- ⑬ The Roots-Seeking Movement Among the Aga-Buryats: New lights on their shamanism, History of Suffering, and Diaspora. In *Mongolian Culture Studies IV - A People Divided : Buriyat Mongols in Russia, Mongolia and China*. Konagaya Yuki(ed.) [International Society for The Study of The Culture and Economy of The Ordos Mongols (OMS E.V.), 2002] pp.88-110
- ⑭ Darkhad shamanism:The cult of vengeful spirit of shamans (Mongolian), *BULLETIN The IAMS News on Mongol Studies* No1(25), No2(26) [International Association of Mongol Studies, pp.43-50, 2000]
- ⑮ 「平原に聴く、シャーマニズムの息吹」 『季刊 民族学』 93, pp.90-103, 2000

以上のほか、現在に至るまで論文著書多数

5. 備 考 : 2010年 文学博士 (総合研究大学院大学)

業績紹介

「モンゴルにおけるナショナリズムならびにエスニシティに関する研究」に対して

紹介者： こながや 有紀

(人間文化研究機構 理事)

島村一平氏は、ポスト社会主義期におけるモンゴルを対象に、社会の内部における対立や差別のもととなるエスニシティやナショナリズムの問題について、シャーマニズムの復興やチングス・ハーン言説の隆盛といったいわゆる伝統の復興現象について、斬新な切り口で新しいモンゴル地域研究を開拓してきた。さらに、氏の研究は、国際的に非常に強い発信力を有しているという点においても高く評価されるものである。

第一に、島村氏の研究は分野横断型のモンゴル地域研究を開拓したという特徴を有している。彼は、ポスト社会主義モンゴルにおいて、シャーマニズムを通じてエスニシティが再構築される過程について、文化人類学的な調査にもとづきながら、社会学や歴史学の成果を踏まえた上で具体的に明らかにした。文化人類学においてシャーマニズムが社会の変革期に活性化することは知られていたが、シャーマン自身が具体的に現実をどのように変えていっているのかという実態のわかる研究は非常に少なかった。島村氏は、のべ6年にもわたる長期フィールドワークを行うことで、外部の人間が容易に知ることができなかったモンゴル系の集団ブリヤートの精神世界に光を当てることに成功した。彼が研究対象としたブリヤートという集団はモンゴル国内において1930年代、男性人口の半分以上が粛清されるという悲劇的な経験をしている。彼らは絶たれてしまった系譜をシャーマンに「憑依」してきた霊の語りによって新たに創造し、新しいエスニシティを再構築しているという実態を豊富な現地データをもとに明らかにした。シャーマニズムに託された現代的機能を具体的に明らかにした本研究は、シャーマニズム研究の隘路を大幅に拡大するものである。

島村氏はさらに、現代におけるチングス・ハーンをめぐる言説や表象について、国際的に比較し、ナショナリズム論の視点から分析した。モンゴルでは、ソ連と社会主義によって民族主義が抑圧されたがゆえにナショナリズムが構築されてきた過程を明らかにし、「印刷社会主義」ないしは「反作用的読み替え」というキーワードで読み解いた。また、従来ほとんどなされてこなかった、ポピュラー音楽という切り口からグローバル社会に対処するナショナリズムを読み解くという斬新な研究も開拓した。

以上のような研究の成果を国際的に発信していることが、島村氏の研究における重要な第二の特徴である。上述したシャーマニズムの研究『増殖するシャーマン—モンゴル・ブリヤートのシャーマニズムとエスニシティ』は、The Roots Seekers: Shamanism and

ethnicity among the MongolBuryats として英訳版も刊行された。また、モンゴル語への翻訳もモンゴル科学アカデミー歴史学研究所から申し出を受けて進行中である。

この研究は、イギリス、ドイツ、アメリカ、中国、モンゴルなどで論文や事典の項目として発表され、国内外で好意的な書評が発表されるなど世界的に高い評価を得てきた。また、チンギス・ハーンの言説や表象に関する国際比較はモンゴル語で刊行されている。

最後に特筆しておきたいのは、彼の英語の著書や論文は、欧米の理論一辺倒ではなく、日本で練り上げられてきた理論や事例も多数参照しながら論を展開する点である。こうした手法は、海外の読者に対して日本におけるモンゴル地域研究への関心を高めたといわれている。日本における文化人類学的なモンゴル地域研究は欧米よりも歴史が古いにもかかわらず、日本語で書かれていたものがほとんどであるため、世界的に参照されることは少なかった。これに対して彼は、英語やモンゴル語による著書や論文の中で「日本の研究を参照しながら紹介する」という戦略を採っており、日本の地域研究の世界への発信に大いに貢献しているといえよう。

以上のことから、島村氏がさらなる発展を嘱望しうる研究者であることは疑いない。

2014年度
大同生命地域研究特別賞

板垣 真理子 氏
(写真家)

略 歴

板垣 真理子(いたがき まりこ)

1. 現 職 : 写真家 文筆家
〔勤務先電話番号 090 (8435) 7665〕
2. 最終学歴 : 文京短期大学英文科 (現、文京学院大学) (1972 年)
3. 主要職歴 : 1972 年～1973 年 東京海上火災保険株式会社
音楽修業と渡米の後
1981 年～ フリーランスの写真家
現在に至る

(以下、すべて写真家・文筆家としての仕事と並行する)
2000 年～2011 年 日本写真芸術専門学校講師
2002 年～2009 年 日本ジャーナリスト専門学校講師 (学校閉鎖まで)
2003 年～2008 年 文教学院大学自由学科講師 (2003 年以前はオープン
カレッジにて講師)
現在に至る
4. 主な著書・論文 :
 - ① 「キューバへ行きたい」(サンテリーアと革命と歴史/ とんぼの本) [新潮社, 2011]
 - ② 「ブラジル紀行」(バイーア・ブラック加筆加写真/ 復刊本) [スペースシャワーネットワーク, 2009]
 - ③ 「アフリカン・ビューティ」(アフリカ女性の美/ 写真集) [三五館, 2009]
 - ④ 「武器なき祈り」(アフロ・ビートという名の闘い/ フェラ・クティの生涯) [三五館, 2004]
 - ⑤ 「アフリカ・喜・気・樹」(太陽がくれた詩と写真/ 写真詩集) [理論社, 2003]
 - ⑥ 「キューバ甘い路上」(路地裏が育んだアフロ・キューバン/ 写真集)[フィールドワイ, 2002]
 - ⑦ 「虹色の子供たち」(熱帯の子供たちの輝く笑顔) [理論社, 2001]
 - ⑧ 「キューバ・愛!」(ブエナ・ビスタ・ソシアル・クラブと音楽揺籃の地) [作品社, 2000]
 - ⑨ 「カーニバル・イン・ブラック」(ブラジルに渡ったアフリカの神々と祭り) [三五館, 1997]
 - ⑩ 「バイーア・ブラック」(ブラジルの中のアフリカを探して) [トラベルジャーナル, 1997]
 - ⑪ 「魔女ランダの島・バリ」(癒しとトランスを求めて) [スリーエーネットワーク, 1996]
 - ⑫ 「ベトナムの人」対米戦終結 20 周年のベトナム(揺らぎ続ける花と陽の国) [三五館, 1996]
 - ⑬ 「踊るカメラマン」(アフリカ・ブラジル・中国の旅) [晶文社, 1993]
 - ⑭ 「歓喜・AYO」(西アフリカ写真集) [情報センター出版局, 1991]
 - ⑮ 「おいでよアフリカ」(西アフリカの街と祭りと女たち) [晶文社, 1990]

以上のほか、ナショナル・ジオグラフィック誌連載などの寄稿、著書多数

5. 写真展 :
 - ・ 2011 年「アフリカ・ブラジル・キューバ」 Rainyday Bookstore& Café / PARCO リブロ
 - ・ 2010 年「写真家たちの日本紀行」 キヤノン品川
 - ・ 2009 年「アフリカン・ビューティ」 キヤノン品川

- ・ 2009 年「ブラジル写真展」青山ブラジル大使館
- ・ 2002 年「キューバ・甘い路上」キヤノン銀座、ハバナのギャラリーオフィシオ
- ・ 2001 年「熱帯の色と顔」宮崎県立美術館
- ・ 1991 年「歓喜・AYO」PARCO、TOKYO・FM ホール他
- ・ 1989 年「Smiling Africa」六本木 AXIS ギャラリー
- ・ 1984 年「アフリカ・オペラ」渋谷 PARCO100chTV

以上のほか、多数開催

業績紹介

「熱帯地域における音楽文化の記録と紹介に関する啓発活動」に対して

紹介者： 島田 周平

(東京外国語大学大学院総合国際学研究院 特任教授)

板垣真理子氏は、アフリカ、南米、アジア各地を旅し、人々が歌や音楽や踊りでみせる様々な局面を、美しく生き生きとした写真と文で表現し我々に多くの感動を与えてきた。

彼女は当初音楽の途を目指したが、「海外であるジャズシーンに遭遇したことで、音楽家ではなくその場を撮る側に回ることになった」という。その後写真家として独立し、キース・ジャレット、パット・メセニーなどのカレンダーを手掛け、マイルス・デイビスの東京講演でステージ撮影を行うなど写真家として精力的に活動し成功を収めてきた。その一方で、日本では未だ大きな広がりを見ていなかったワールド・ミュージックに対する関心を強め、アフリカ音楽に惹かれていった。

ポップ・ミュージックの旗手であったキング・サニー・アデの音楽に魅せられ、1984年に初めてナイジェリアに出かけた。この時、もう一人のポップ・ミュージックの雄であり且つアフリカ人の解放と反体制運動の旗頭でもあったフェラ・クティと出会い、後に彼の半生記を著し、アフリカのポップ・ミュージックのメッセージ性についても広く紹介した。この後もナイジェリアとりわけ西部ナイジェリアには足繁く通い、ヨルバの文化や多神教の神々について様々な発表をおこなってきた。

やがてヨルバの文化や神々(ジュジュ)が奴隷貿易によって大西洋を渡り、新大陸で不思議なミックスをみせる宗教となって根付いていることを知り、ブラジル北東部バイア地方やカリブの島国キューバに出かけた。それらの地域を旅する中で、ヨルバのジュジュがブラジルではカンドンブレ、キューバではサンテリアとして人々の間に根付いている様子を豊かな写真と文で活写し本として出版した。複雑な神話、リズムと音楽、歌、踊り、色、象徴物、儀式、祭りなどにみられる大西洋を跨いだ繋がりに興味をそそられ、板垣氏はこの大西洋トライアングルの土地をたびたび訪ね、その時に感じた深い思いを本の出版などを通じ広く社会に紹介した。

神々の世界を訪ねる旅は、アフリカの植民地支配の歴史や現代のブラジルにおける人種差別、さらにはキューバにおける政治体制を覚醒的に意識させる旅でもあった。彼女は、「音楽が世界を映す鏡となるような視点」で、ブラジルのカーニバルやキューバのサンテリアを観察してきた。このような視点で撮られた写真は、社会科学や人文科学といった学問では掘りさげにくい、人々の現代的日常生活の基底にある文化を映し出す効果を持っており、人々の地域に対する興味を喚起する点で非常に大きな貢献をなす仕事であったと評価できる。

彼女の活動の多彩さは驚くべきものがあり、アフリカ女性の美を追求した作品群や、マハレに生息する野生チンパンジーの生態を追った撮影記録、さらにアフリカ、ブラジル、キューバのみならず、世界各地の映画の紹介などでも活躍している。キューバの音楽家を描いて世界的な大ヒットとなった映画「ブエナ・ビスタ・ソシアル・クラブ」のメンバーに直接会い収録したインタビュー記録や彼らの世界各地での公演記録は、「アサヒグラフ」で大特集され高い評価を得ている。

上梓した書籍は、現在まで17冊にのぼる。キューバ日本国交樹立75周年記念としてハバナで開催した写真展も含め、国内外で多くの写真展を開催してきた。「ナショナル・ジオグラフィック」誌での連載や日経新聞における連載など、雑誌新聞等での発表も多い。地域、とりわけアフリカ、ラテンアメリカなどの地域の文化の多様性や歴史的深みを、多くの写真や文で表現し人々に感動を与えてきた点は、本研究特別賞に値するといえる。